

## 授業の一場面から考えたこと

桜花学園大学 教授 浅野卓司

### ■ 図画工作ってアクティブ・ラーニング？

学びの方法としてのアクティブ・ラーニングという言葉が、大学教育をはじめ、小学校の現場でも一般的になりつつあります。アクティブ・ラーニングという言葉はもう古く、「主体的・対話的で深い学び」という表現の方が良いかもしれません。

図画工作・美術とアクティブ・ラーニングとの関係性の話になると、「何を言っているの？図画工作・美術は“昔”からアクティブ・ラーニングじゃないの！」ということと言われる先生方が圧倒的に多いような気がします。私も、この言葉を耳にした時、確かに体全体の感覚を使って材料に触れ、試行錯誤を繰り返して作品づくりをしたり、友達と話し合いながら作品を鑑賞する様子は、疑いもなく「アクティブ」な活動だと思っていました。

そう考えると「図画工作・美術って、なんて素晴らしいんだ！ 学びの最先端に行く教科かも？」と思いがちなのですが大学で授業をしていると、アクティブ・ラーニングは単に“アクティブさ”を求めるような授業ではないのでは？という疑問が湧いてきました。



## ■先生、これってどうやってつくるの？

「先生って、図工の先生でしょ？ 3歳児が喜ぶような造形ってなに？ 教えてよ」

「先生、今度実習でき、5歳児の責任実習するんだよね、何か良いアイデアない？」

「これって、どうやってつくってあるの？ ちょっとやってみて！」



授業やゼミで学生と話をしていると、こういうやりとりは日常的です。現場へ行った卒業生や、就職して間もない若手の先生からもこういう質問をされることがあります。題材やアイデアが浮かばない・方法がわからないので、手っ取り早く教えて欲しいという要望はかなり多くあります。

学生に対しては、「そんなことが分かれば苦労なんかしないよ、自分でやってみれば？」と答えるようにしています。ちょっと意地悪な返事かもしれませんが、とにかく、簡単で早く仕上がり、比較的安くできそうな題材を選ぼうとする傾向もあります。

**あれ？ちょっと待てよ、図画工作・美術は「アクティブ・ラーニング」であり、学びの深化が期待できる科目じゃなかったの**

**かな？**理想と現実は何か大きなギャップがあるような気がします。

学び方としてのアクティブ化は、知識や技能の獲得において記憶の定着や体験的な反復学習におけるスキル向上という点で、確かに効果的だと言えます。得られた知識(何が身についたか)をどのように活用するかということについても、実際に活動を通して検証をしていくことが誰の目にも明らかです。一方で、学習により、実際にどのような力が身についたのかを確かめるためには、ルーブリックのような評価指標を用いて、その伸長を図ることも重要な課題として取り上げられるようになってきました。保育者養成において教授する造形・美術は、単なる造形素材や教材の体験だけではなく、自分たちが近い将来に造形の指導をする場面(子どもたちが材料や用具に対する基礎的・基本的な扱い方を体験的に学び、描いたり作ったり、みたりする活動の中で、わかったことや発見したことを喜びとして感じながら、さらに主体的に関わるような意欲や態度を育てることを)を想定しつつ、それをどのような道筋(題材やカリキュラム)で育てるかということを考えられる力を育てることだと思います。

そういう意味で、最近は「安易に方法だけを教えない」ということを教える方針(?)として授業や学生指導に望んでいます。

## ■粘土の授業から考える

現在、教職課程を持つ多くの養成校は、養成カリキュラムの検討をされているのではないのでしょうか。本学も再課程認定を含めた議論・調整に追われる毎日です。中でも造形に関わる授業は、この編成において大きく様変わりをしそうです。単位の実質化に向けた教科内容の見直しを図る中で、これまで取り組んできた授業題材を次の段階でどのようにしようかなと考えていますが、研究誌に投稿した「粘土を崖から採取して、こねて焼成する」という、実に“アクティブ”な授業を継続してみようかなと思っています（「小学生を対象とした粘土活動の指導に関する一考察」(2017)）。



この授業は実に手間がかかります。長靴を履いて学内の粘土層がむき出しになっている崖に登り、石ころや草の根っこを格闘しながら質のよい粘土を採取します（崖から滑り落ちてお尻が茶色くなって困っている学生、靴が半分

以上粘土に埋もれて半泣きになっている学生も少なくありません）。それに、この授業においても、あまり具体的な方法を伝えません。「どうしたら土から粘土を採取できると思う？」という疑問から始

まります。そうすると、インターネットで調べたり、実際にザルなどを使って石ころなどを除去することを考えたり、試さざるをえません。最終的に、多くの学生は採取した粘土を、バケツを使って水簸を行い、粘土を抽出していました。






## ■ 植木鉢ってどうやってつくるの？


耐火度や粘性を上げるために採取した粘土に、童仙房や木伏を混ぜたりしながら練っていきませんが、出来あがった粘土を使って、粘土の遊びについて考えたり基本的な扱い(水を加えて調整することや、粘土同士の接着について)は、知識として伝えています。

次に粘土を使って植木鉢を作ろうという課題を提示しています。ここでも「植木鉢をつくることを課題にしたいんだけど、どうやって作ったら良いと思う？」と聞くと、怪しい手つきや身振りで「こんな感じで」と答える学生がいます。先日の授業では、「先生、縄文土器みたいに粘土を紐にして作ったら？」という学生がいたので、「それってどうやってつくるの？他にもどんな方法がある？」と返したら、違う学生が「粘土にパンチして穴を掘る」とか「棒でほじくって作る」という面白いアイデアも出てきました。


「じゃあ、作る方法はどれでもいいよ、でも粘土どうしをくっつけたりするときは、どんな方法があったかな？」とたずねると、「習った“どべ”を使えばいいじゃん！」と元気な答えが返ってきました。




こういう方法もあるんだ



新しい方法、発見したよ



先生、見て！  
パンチでもつくれる



キャンプファイヤー  
みたいだね



粘土の色を変えて  
みたよ、焼けるか



できあがりは、このく  
らいの厚みがいいかな

## ■ 授業を通して考えたこと

粘土という材料は、粘性が高く、操作・行為の可逆性があるため、何度でもやり直しができることは大きな魅力だと思います。市販の土粘土を使うこともありますが、崖に行って粘土をとる、それで器(植木鉢)を作るというのは、良くも悪くも学生の記憶に残る活動になっています。粘土の基礎的な扱い方を教えることは、造形活動を支援する者が身につける知識や技能を育てる上で大切なことですが、ここを中心的な目的としない授業の方が、自ら考える力をつけることに繋がるのではないかと感じています。

この授業を構想する前の段階で、ある幼稚園の先生から「粘土の実践をやってみたい」という要望を受けて、一緒に考えたことがありました。しかし粘土でスモックが汚れるからという保護者からの要望(?)により、1年間でこの取組みは終わりを迎えてしまいました。多くの園を見てみると、バスを待っている時間を過ごすための自由遊びになっている粘土活動もあります。土・砂という屋外の活動の延長線上に、粘土という活動が遊びに位置づけることが重要であり、“アクティブ”に学んだ学生が卒業後に、面白い活動の展開をしてくれるといいなと期待しています。